

横須賀にあった極秘機関 -陸軍登戸研究所と横須賀-

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 明治大学平和教育登戸研究所資料館 公開日: 2020-11-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚本, 百合子 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/21300 |

横須賀市自然・人文博物館付属馬堀自然教育園開園60周年・
明治大学平和教育登戸研究所資料館開館10周年記念コラボ企画記録
展示 横須賀にあった極秘機関 一陸軍登戸研究所と横須賀一

塚本百合子

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

はじめに

2019年度が登戸研究所資料館開館10周年、横須賀市自然・人文博物館付属馬堀自然教育園開園60周年だった点、どちらも神奈川県内で唯一旧日本陸軍遺構を保存・公開している博物館施設である共通点から、横須賀市自然・人文博物館の2019年度特別展「おいでよ！まぼりの森—馬堀自然教育園の60年とこれから—」にあわせ両館でコラボ企画を開催することとなった⁽¹⁾。特に、米海軍横須賀基地内の極秘機関「GPSO」(Government Printing Supplies Office = 政府印刷補給所)で元登戸研究所勤務員らが勤務していたことから、GPSOを登戸と横須賀に関連のある重要なテーマとして位置付け、横須賀市自然・人文博物館にてコラボ展示「横須賀にあった極秘機関 一陸軍登戸研究所と横須賀一」を開催した。GPSOについては2015年度の企画展でその活動の一端を明らかにしたが⁽²⁾、コラボ展示ではすでに発表した内容に加え、新たに判明した点やこの5年間で収集したGPSO関連資料を初めて展示した。本稿では、このコラボ展示「横須賀にあった極秘機関 一陸軍登戸研究所と横須賀一」よりGPSOについての展示部分を基に再構成し紹介する。

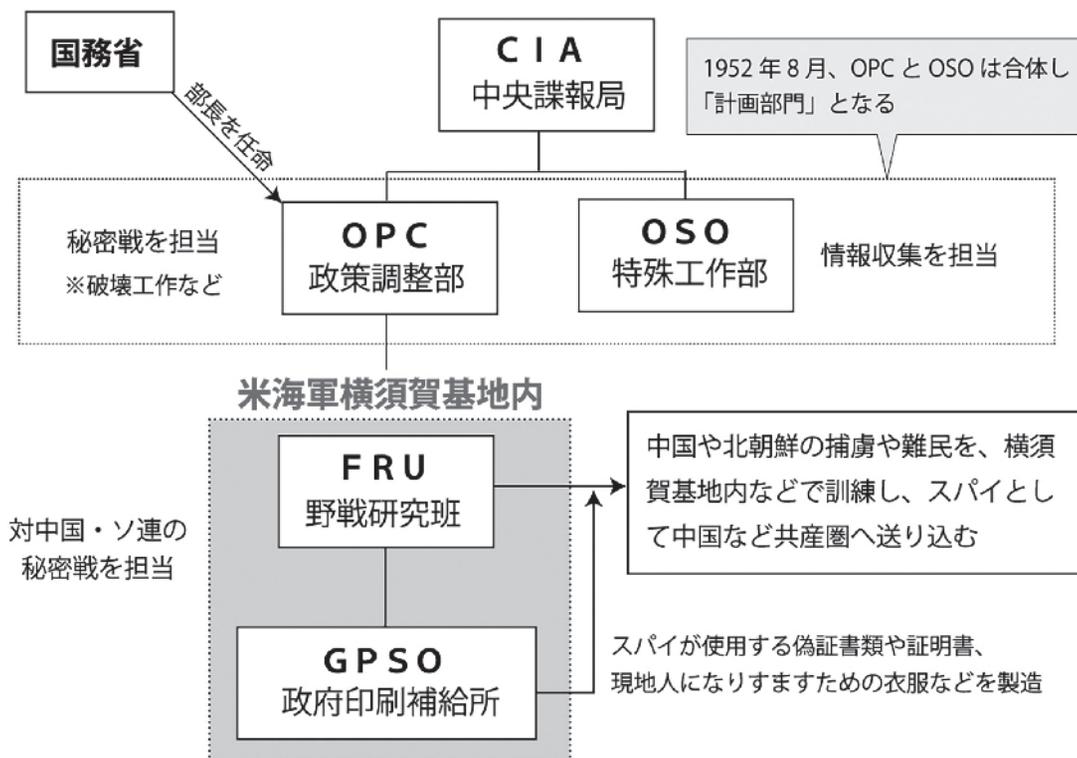
1. GPSOの概要

(1) GPSO (Government Printing Supplies Office) とは

戦後、ソ連と米国の対立が深まり、米国は共産圏へのスパイ活動を重要視するようになる。1950(昭和25)年6月に朝鮮戦争が勃発したことで、対ソ連・中国へのスパイ活動はさらに重要度を増すこととなる。このような状況下、極東における対共産圏への秘密戦の重要な拠点として元登戸研究所第三科科长・山本憲蔵をチーフに、元第三科員が米海軍横須賀基地に集めら

れ、極秘機関 GPSO が基地内に開設された。以上は 2015 年度に当館で開催した企画展「NOB-ORITO1945 - 登戸研究所 70 年前の真実 -」で明らかにした内容である。今回、ジャーナリストの春名幹男が元 CIA 要員へのインタビューや米国立公文書館での資料調査をまとめた『秘密のファイル CIA の対日工作』（新潮文庫、2002 年）と GPSO チーフを務めた伴繁雄（元登戸研究所第二科第一班長）の手記を照合することで、GPSO は CIA（Central Intelligence Agency = 中央情報局）の傘下だったことがわかった（第 1 図参照）。CIA の中でも破壊活動を含む秘密戦⁽³⁾を担当していた OPC（Office of Policy Coordination = 政策調整部）は、対中国・ソ連の秘密戦を担当する部隊 FRU（Field Research Unit = 野戦研究班）を米海軍横須賀基地内に開設した⁽⁴⁾。この FRU の下に GPSO がおかれたのである⁽⁵⁾。FRU は中国や北朝鮮の捕虜・難民を横須賀基地内などで訓練し、彼らをスパイとして中国、北朝鮮に送り込んでいた⁽⁶⁾。GPSO の役割は、彼らのスパイ活動に必要な偽造証明書や変装道具などの製造と真贋判定の研究だった。

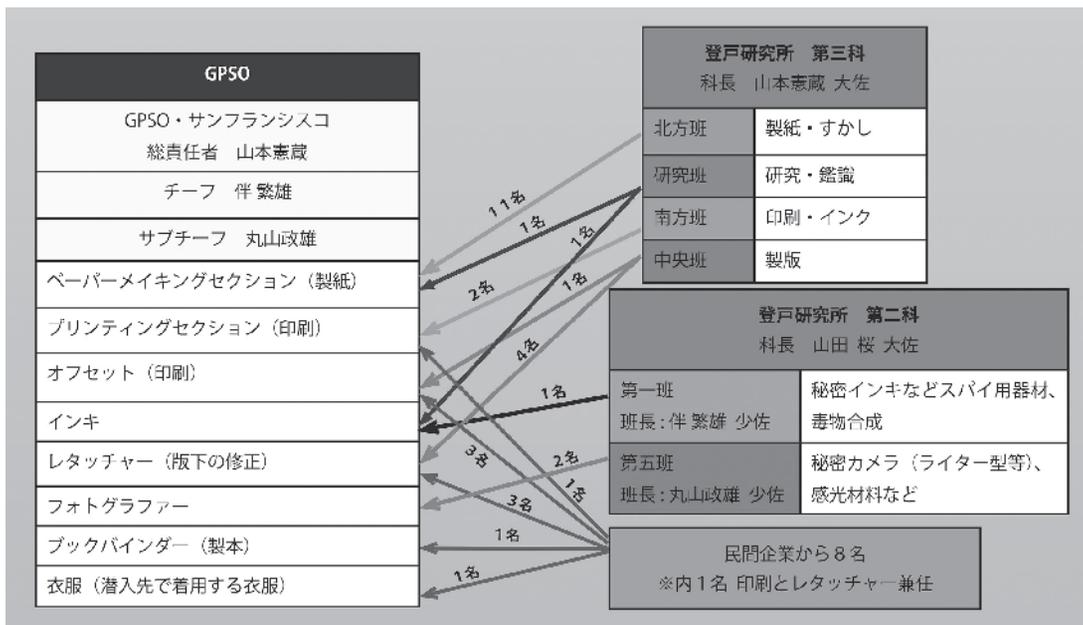
FRU および GPSO が横須賀に開設された正確な時期はわかっていない。しかし、開設の背景には、1951 年 10 月 23 日の NSC（National Security Council = 国家安全保障会議）における「NSC10/5 号文書」の決議があったと考えられる。「NSC10/5 号文書」は「秘密工作の早期拡大は国家的責任」であるとし、「戦略的地域（中国・ソ連）での地下抵抗運動や秘密ゲリラ活動を最大限展開」することを提言した⁽⁷⁾。極東における重要な秘密戦拠点として FRU および GPSO は位置づけられたのである。



第 1 図 CIA と GPSO の関係図 春名幹男『秘密のファイル CIA の対日工作』（新潮文庫、2002 年）、伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』原稿を基に筆者作成。

(2) GPSO で勤務した元登戸研究所員たち

GPSO の初代チーフには山本憲蔵が任命された。その理由は、山本には偽造と流通の経験が充分にあり、対中国・ソ連の情報戦の経験があったからだ。山本は GPSO メンバーに元第三科員の中でも特に北方班員（製紙部門）および中央班員（製版部門）を多く採用した（第 2 図）。伴によれば、ソ連や中国の印刷物は紙質も印刷も粗悪だったというし、パスポートや紙幣は自国で印刷したものはごく一部であり、大部分は米国や英国で印刷していたというので、GPSO で偽造工作を行うにあたり、印刷面ではあまり高い技術は必要なかったのであろう。こうして米海軍横須賀基地内で元第三科員による活動がスタートするが、1952（昭和 27）年 6 月、山本らは横須賀からサンフランシスコ郊外のサン・ブルーノにある NED（Navy Engineering Division = 海軍機械部品補給処）へ異動する。それは、GPSO と同様の機能を米国内にもたせるためだった⁽⁸⁾。その後、登戸研究所の技術を米国人に教えるため、GPSO 員は 1952 年以降、2 年交代で横須賀とサンフランシスコを行き来した。なお、山本は GPSO の総責任者として 1952 年以降はサンフランシスコで指揮をとった。そのため、山本の後任として、1952 年 4 月、長年秘密戦研究を行ってきた元第二科班長・伴繁雄が選ばれた。伴は従来の元第三科員に加え、元第二科員、民間企業出身者、米国人スタッフも採用し新たな GPSO チームを結成した。



第 2 図 登戸研究所から GPSO への人の流れ 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』原稿（当館所蔵）を基に筆者作成。

(3) GPSO の活動を示す資料

次に、コラボ展示にて初公開した GPSO の活動を示す資料を紹介する。

①岡田正敬元少佐旧蔵資料

岡田は登戸研究所第三科では分析・鑑識を担当する研究班長を務める技術少佐だった。その経験は GPSO でも重宝された。1952（昭和 27）年 6 月～1954（昭和 29）年 6 月の 2 年間、山

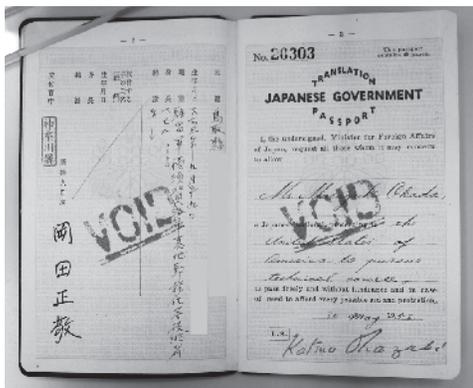
本憲蔵らとともにサンフランシスコへ渡り，NEDの活動にあたった。その際のパスポートおよびアルバムを当館で所蔵している。アルバムには岡田直筆のメモがあるため，人名や当時の研究の詳細がわかるようになっている。

・パスポート（第3図）

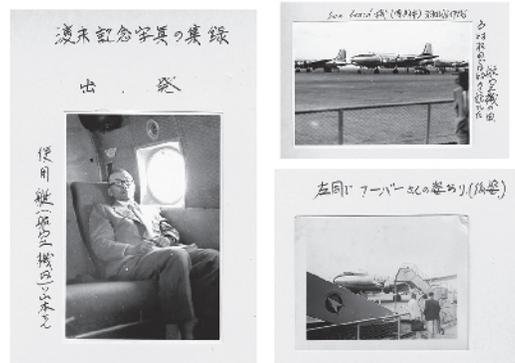
職業欄には「駐留軍横須賀海軍基地勤務化学者」，渡米理由は「技術修得のため（to pursue technical course）」となっている。

・サンフランシスコへ出発する GPSO 職員（第4図）

1952（昭和27）年撮影。渡米するにあたり，羽田飛行場から米軍機でサンフランシスコへむかった。グアム島およびホノルルの米軍基地で給油し，20時間以上かけてサンフランシスコへ到着した。GPSO チーフの山本憲蔵が機内で寛ぐ姿が記録されている。また NED の主任フーバーが日本にまで GPSO 職員を迎えにきたことも岡田直筆のメモからうかがえる。



第3図 岡田正敬のパスポート 資料 No.1734



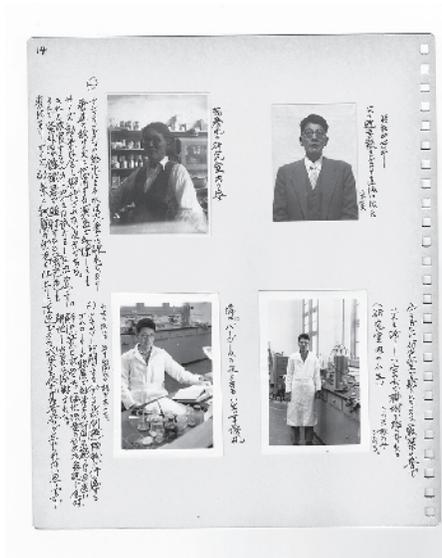
第4図 サンフランシスコへ出発する GPSO 職員 岡田正敬旧蔵，写真アルバム「特 アメリカ滞在中の記録写真」より。資料 No.1739

・サンフランシスコでの研究のようす（第5図）

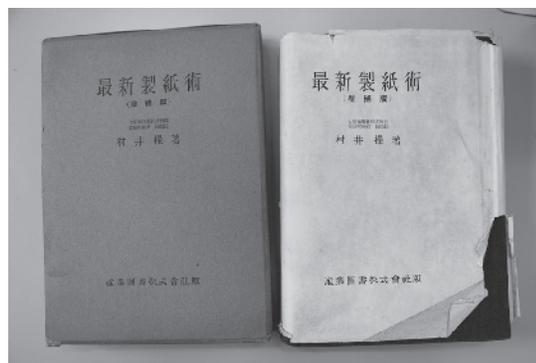
1952（昭和27）～1954（昭和29）年頃撮影。活動は極秘だったため，岡田自身がメモに残しているように，職場内の写真が残っていることは大変珍しい。メモにはサンフランシスコの水質が日本と異なるため，製紙技術の開発に苦労したことが書かれている。また，印刷機の改善策も求められ，米国の秘密戦において元登戸研究所第三科員は重要な存在だったことがうかがえる。

②木下長吉旧蔵資料

木下は登戸研究所入職前，製紙会社で勤めていた経験から，登戸研究所守衛から第三科北方



第5図 NEDでの研究のようす 写真アルバム「特 アメリカ滞在中の記録写真」より。資料 No.1739



第6図 村井操『最新製紙術』増補版 資料 No.1423

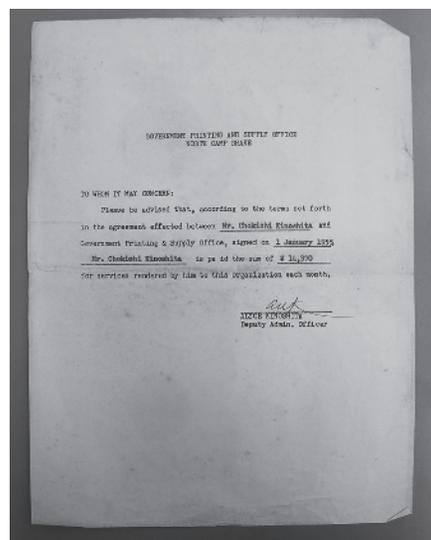
班に異動となった経歴がある。1952年6月より GPSO 製紙班に勤務。

・村井操『最新製紙術』増補版（第6図）

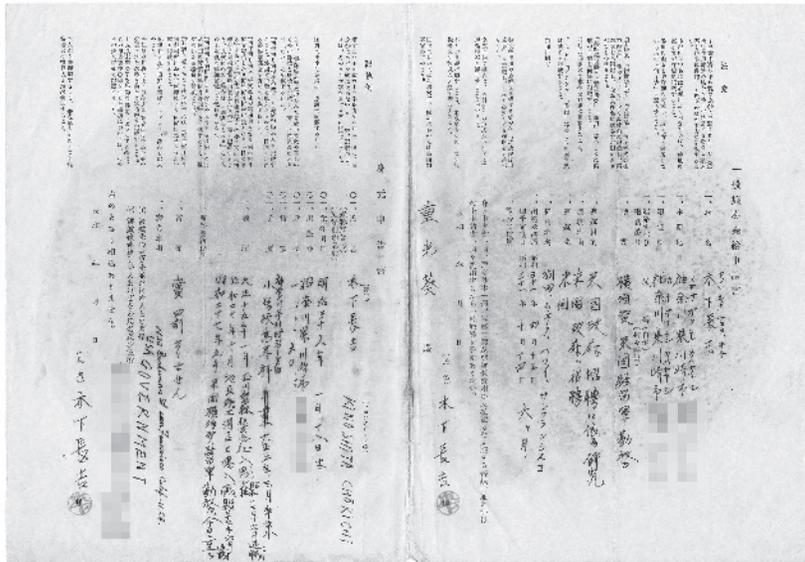
1947（昭和22）年初版，1953（昭和28）年増補4版。木下は戦後，製紙関係の仕事についていなかった。そのため，1952年より GPSO の製紙班で働くこととなり，最新の製紙技術を研究するために購入したと推測される。

・給与についての書類（第7図）

GPSO と木下との間に1955（昭和30）年1月1日に月給14,370円の給与契約が交わされたことがこの書類よりわかる。「GOVERNMENT PRINTING AND SUPPLY OFFICE (GPSO)」および「NORTH CAMP DRAKE」（埼玉県朝霞市にあった米軍基地）担当者宛となっているが，NORTH CAMP DRAKE が GPSO に関係していたのか不明。



第7図 GPSO 給与に関する書類 資料 No.1426-2



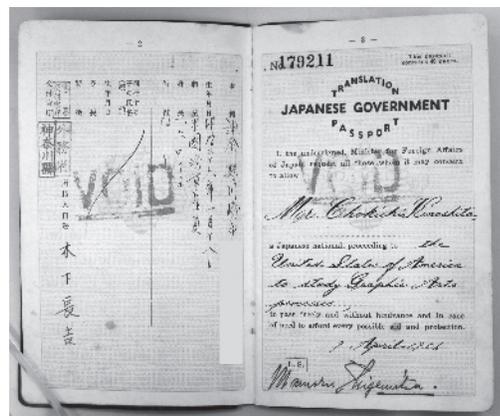
第 8 図 一般旅券発給申請書・身元申告書 (副) 資料 No.1426-008

・一般旅券発給申請書・身元申告書(副) (第 8 図)

1956 (昭和 31) 年作成のパスポート発給申請必要書類の控え。この資料により、木下は戦前長期にわたり製紙会社に勤め、その経験から第三科北方班、戦後は一時期別の職種に就くも GPSO に勤めることになったことがわかる。

・パスポート (第 9 図)

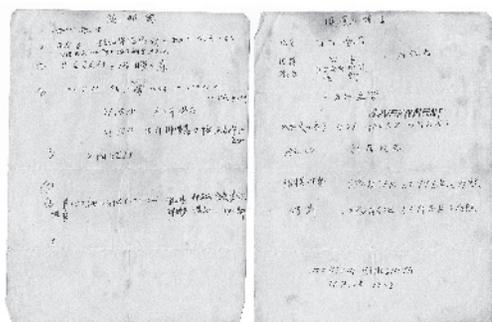
木下は 1956 (昭和 31) 年 5 月～1958 (昭和 33) 年 5 月の 2 年間、サンフランシスコで勤務した。職業欄には「米国海軍雇員」、渡米理由は「製図統計研究のため (to study Graphic Arts processes)」とある。



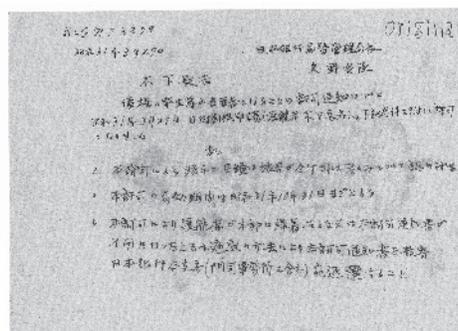
第 9 図 木下長吉のパスポート 資料 No.1424

・「債権の発生」と「説明書」下書きおよび「債権の発生などの当事者となることの許可通知について」(第 10 図, 第 11 図)

1949 年 12 月に制定された「外国為替及び外国貿易管理法」(いわゆる外為法) により対外取引は原則禁止だったため、外貨を得る場合には事前に日本銀行に申請をしなければならなかった。日本銀行為替管理局長名で出された「債権の発生などの当事者となることの許可通知について」と「債権の発生」および「説明書」の下書きから、木下は「米国政府招聘の研究のため」米国へ渡航し、米国政府が滞在費用を請け負ったことがわかる。滞在期間は 1956 年 4 月～10 月となっているが、先に紹介したパスポートには 10 月に帰国した形跡はない。



第 10 図 「債権の発生」と「説明書」下書き
資料 No.1426-012



第 11 図 「債権の発生などの当事者となることの許可通知について」 資料 No.1426-014

2. GPSO の活動のあゆみ

(1) GPSO の設備

当初 GPSO は米海軍横須賀基地内に残存していた旧横須賀海軍工廠の製図・刷版所だった建物で活動していた(第 12 図)。ここは FRU および GPSO 関係者しか立ち入ることができず、一般の米軍関係者は入ることはできなかった。建物内は GPSO スタッフと FRU 米国人専用エリアに分けられており、米国人専用エリア内には一般の GPSO スタッフは立ち入ることはできなかった。建物 1 階は、製紙と写真部門がおかれ、抄紙機や暗室があった。2 階は印刷、製版、レタッチャー、チーフ室がおかれ、オフセット印刷機と凸版印刷機があったという⁽⁹⁾。

1954(昭和 29)年春には、基地の北側「松が浜」に FRU 専用施設が新設され、GPSO も同所へ移動した⁽¹⁰⁾。新設備の手配は山本に一任され、登戸研究所北方班で使っていた抄紙機をモデルとして GPSO の抄紙機ができあがった。また、安定して多量に偽造を可能にするため、動力としてボイラーを新設し、水道管も新たに敷設した(第 13 図参照)。登戸研究所においても、偽札製造が本格化する中でボイラーの新設や水道をひいた経緯があるため、山本の偽造工作の経験を米国が評価していたことがわかる。旧横須賀海軍工廠の建物を使用していた時期は活動も設備もごく小規模だったというが、朝鮮戦争を経て CIA の対共産圏への秘密戦が拡大していく中で、極東の重要な秘密戦供給拠点として GPSO の設備拡充が必須になったのであろう。

(2) 「チャイナ・ミッション」と GPSO

朝鮮戦争休戦後、GPSO は対中工作である「チャイナ・ミッション」に活動の重きをおいたと考えられる。春名によれば、「チャイナ・ミッション」とは中国共産党政権を打倒するため 1954 年秋から CIA が展開した秘密戦であり、指揮系統は米海軍横須賀基地内にあった⁽¹¹⁾。亡命した中国人を横須賀基地、厚木基地、茅ヶ崎などで訓練したのちに中国本土に送り、ゲリ



第12図 GPSOが一時期活動していた建物
旧横須賀海軍工廠製図・刷版所だった。
(2015年当館撮影)



第13図 米海軍横須賀基地内のGPSO関連施設
(航空写真：1955年1月米軍撮影，国土地理院所蔵，USA-M76-83)

ラ活動や破壊工作を行わせようとしていた。しかし、この「チャイナ・ミッション」は成果が上がらず、1956年には終了した。

(3) ベトナム戦争とGPSO

「チャイナ・ミッション」の成果が上がらない中、1954年から幹部クラス以外のGPSO勤務員も米国のNEDと横須賀のGPSOを往来するようになる。これは対ベトナム工作が影響してのことであろう。ベトナム戦争が長期化する中で、当然CIAによる秘密戦も重要視されていくこととなる。そのため1955年のベトナム戦争開戦後は、GPSOおよびNEDの活動は対ベトナムに重きをおくようになったようだ。現に、元GPSO勤務員によれば、ベトナム紙幣の偽造も行っていたということである⁽¹²⁾。

その後、1961(昭和36)年にGPSOは閉鎖した。米国でのNEDの活動が軌道にのり、日本人が中心のGPSOは不必要になったということが考えられる。GPSO閉鎖とともに大半の勤務員が退職となった。しかし技能が認められた数名は米国にスカウトされ、引き続き米国の秘密戦に関わり、そのまま生涯米国で過ごすものもいた。

おわりに

伴および元GPSO勤務員の証言と春名の調査内容を照合することで、GPSOは極東における対共産圏への秘密戦において重要な拠点だったことが分かった。開設の明確な時期はわかって

いないが、1950年～1951年には開設していたようなので、GHQ占領下で開設したとみてよいであろう。占領下においては、G2（GHQ参謀2部）の傘下にGPSOは置かれたのではないかと筆者は推測しているが、GHQ撤退後、CIC（Counter Intelligence Corps = 対敵諜報部隊）やキャノン機関の活動を引き継いだCIAがFRUを開設し、GPSOの活動も引き継いだのではないだろうか。この点は今後調査を進めていく必要がある。

〔注〕

- (1) コラボ企画の詳細については本誌 p.179 および内船俊樹・塚本百合子「館園施設の歴史的背景を契機とした連携—横須賀と登戸におけるコラボ企画の展開—」（神奈川県博物館協会『神奈川県博物館協会報』第91号、2020年）を参照されたい。
- (2) 明治大学平和教育登戸研究所資料館『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第2号、2016年。
- (3) 「covert operation」のこと。CIA文書原資料を発掘し調査した春名幹男は「covert operation」を「秘密工作」と訳しているが、暗殺や破壊活動など危険な工作も含め登戸研究所では「秘密戦」とし、これまで当館で紹介してきたGPSOの活動についても「秘密戦」を採用してきたため、本稿でも「秘密戦」を採用する。
- (4) 春名幹男『秘密のファイル CIAの対日工作（上）』（新潮社、2003年）、p.451。なお、春名はFRUを「現地調査部隊」と訳していたが、本稿では伴繁雄の「野戦研究班」を訳として使用する。
- (5) 伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』原稿、137枚目。
- (6) 春名、『秘密のファイル CIAの対日工作（下）』（新潮社、2003年）、p.17。
- (7) 同上。
- (8) 伴、前掲138枚目。
- (9) 2019年6月27日、元GPSO勤務員への筆者聞き取り。取り上げた証言内容について秘匿性が高いため、ご本人のご希望もあり匿名とさせていただきます（以下同）。
- (10) 2015年10月16日、元GPSO勤務員への筆者聞き取り。
- (11) 春名、『秘密のファイル CIAの対日工作（下）』（新潮社、2003年）、pp.18-19。
- (12) 2015年10月16日、元GPSO勤務員への筆者聞き取り。

〔参考文献〕（著者名五十音順）

- 斎藤充功『謀略戦—ドキュメント陸軍登戸研究所』（時事通信社、1987年）
春名幹男『秘密のファイル CIAの対日工作（上）』（新潮社、2003年）
明治大学平和教育登戸研究所資料館『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第2号
（明治大学平和教育登戸研究所資料館、2016年）
渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦—科学者たちの戦争』（吉川弘文館、2012年）